

年間第6主日

福音朗読 マタイ5・17-37

2023.2.12

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の福音でイエス様は律法についてのことを教えていらっしゃいます。イエス様は律法を廃止するためではなく、完成するためにいらっしゃったとおっしゃいます。律法が人々に与えられたいきさつを、わたくしがたびたび申し上げますことですが、振り返らないと律法のもっている意味を見失ってしまいます。

それは旧約聖書の「出エジプト記」のお話しの中に出てきます。エジプトの国で430年間、10世代にわたって奴隷になってしまった人々を神様があわれんで、そしてそこから救い出す。その人たちがエジプトのような、人が神様に成り代わって、神様の振りをして人を支配する、そのような所に身を置くのはもう二度といやなんだ。そういうような人たちがじゃあどうすればいいか、どのようなことを大切にしながら自分たちの社会を造っていったら、エジプトのようではない、人が人を支配するのではない、互いに助け合う、そういう国ができるのかという、人々が進むべき道を示す、その方向性を示す道しるべとして、神様が十戒をはじめとする律法を与えてくださったんだ、というのが旧約聖書が語っている内容です。

だから、律法というのは、わたしたちの状態に関係なくただ神様を喜ばせるためにある、そういう供え物みたいなものとは違う、ということです。

イスラエルの民は、旧約聖書によれば、ずっと砂漠を旅して、そして神様がお与えになる土地に入ったという物語が出てきます。砂漠ってというのは、わたくしは行ったことがないんですけども、砂漠に行けばどっちに進んで行っているのかほんとに分からない、何の目印もないので、太陽と夜の星とか月とかが頼りで、でも大雑把なもんですけど、どっちに進んで行っているのか分からないっていうことになるらしいです。その砂漠において、神様が人々に掟を与えられたっていうことは象徴的です。

人間というのは本来どのように進んでいいのか、あるいは社会はどのようなことを大切にものにしたらいいのかが分からない中であって、ほっといたらエジプトみたいになってしまう、つまりは、今のエジプトにほんとに申し訳ないんですけど、何回もその名前が使われちゃってかわいそうなんですけど、弱肉強食のものになってしまう。あるいは個人のレベルでも、自分のことばかり考

える人になってしまう。わたしたちの周りにもそういうところが見えるなあっていう人が皆さんの周りにもいるかもしれません。そういう人になりたいって思わないで、そういう人になりたくないって思うはずです。でも、ほっといたらそうなっちゃう。だから神様が、どうしたらいいのか、進み方、生き方を教えてくれた。だから、旧約聖書において律法っていうのは恵みの中の恵み。律法は太陽のようだ。律法は蜂蜜のようだ。(詩編 19・11) 今日の答唱詩編で答唱に「神よ、あなたのことばはわたしの足のともしび、わたしの道の光」とありました。(詩編 119・105) まさにそれは律法賛歌なんですよ。

わたしたちが間違えちゃうと、律法もそうだし、一人ひとりが洗礼を受けて信仰生活を送るということが、何か、何かの神様が、どこかの架空の神様ですよ、大福が大好きだから毎月五の日には大福をお供えする、そうすると神様がそのことを喜んでお礼にお捧げした人に無病息災とか五穀豊穡をくださる(笑)とか、何かそういうような神様のほうがやって欲しいということよりも、どうしたらよいか分からない者を導くために与えてくださったんです、信仰生活そのものが。それを忘れちゃうと、心の中で、はっきりそういう言葉を使うかわかりませんが、洗礼受けてやったのにどうして特別に神様はわたしが望んでいる人生を与えないのか、とか、毎週ミサに出てやってるのにどうしてこの問題が起こるままにしておくのか、みたいな不満の中で生きる、そういうような人間になってしまう。だから、何のために信仰があって、何のために神様に会ったのかっていうことを絶えず気を付けておかないと、それだったら信仰に出会わないほうがまだいい人だったのになあっていうことになってしまうかもしれません。

だから、わたしたちはいつも自分自身を顧みて、どういうふうにしたほうがいいのか、それを考えるなら、わたしたちが例えば誰かを殺してしまうとか姦淫してしまうとか、そういう大きな出来事を犯さなくても、悪口ばかり言って腹を立てているような人にはなりたくない。そのことに気を付けていこう、それが律法に従って生きるということだと思います。そうじゃなければ周りの人も影響を受けて、例えばお父さんお母さんが悪口ばかり言う、そしていつも怒っている、そういうお家だったら、子どもたちもそれに倣ってしまって、悪口家族になってしまう。それは、天の国というよりは地獄なんですよ。

不満の中で、なにも自分の中に溜め込めっていう意味じゃないですけども、でもこの世の中が、自分の人生が思い通りにならない、そしていろんな問題が起こる、そのことを前提にしながら、その中でわたしたちが自分自身の人間性を失わないっていうか、自分のことばかり考えない、そういう者でありたいって思うからこそ、この信仰の恵みに希望をおいて、どのように進んだらいいのかを神様

に尋ねながら歩む。そのために洗礼を受け、信仰生活を送っているということを絶えず思い起こしたいと思います。

何か特殊な掟一つだけを取り上げて大切にすると、勘違いしてしまうんです。そうすれば神様が喜ぶから、そして神様が喜んだんだからお礼にいいことをしてください、みたいな気持ちになっていく。他の人のためだけじゃなく神様に対しても恩着せがましい人間になっていく。そういう人になりたくない、エジプトのようになりたくない、というような思いからいただいた道しるべなんだということを改めて思い起こしながら、わたしたちの中に与えられているイエス様がどのように生きられたのか、何を大切にされたのかを思い起こすし、普段は自分の生活、自分の家族のことを中心に考えてるけど、でもやっぱりこの日曜日のミサの中ではわたしたちの心の視野を広げていただいて、共同祈願を通していろんなかたのことを思い起こしながら祈る、そういう時を過ごすのが、わたしたち一人ひとりにとって、そして社会にとって意味があると信じている、それが信仰生活ですね。

だから、わたしたち一人ひとりが、今、神様との繋がりがどのような関係になっているのかを思い起こしながら、不満の中ではなく、イエス様がそのご自分の生き方を通して示してくださった方向性に従って、それを自分なりのやり方で歩む、ということが大切だと思います。

それを思い起こしながら、わたしたちに進むべき道を示してくださる神様に信頼して、その恵みを一人ひとりの中にいただき直す、その思いでこのごミサをお捧げしていきたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>